
ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に歴々過去の記憶編々

【Nコード】

N1000Z

【作者名】

k a i

【あらすじ】

雛見沢に引越す前のレナの物語です。レナがこれまでの歴史を語る！

終わりの始まり

主人公

竜宮レナ（りゅうぐう

れな）

主人公の中学の友達

せがみなな
瀬上奈菜

side レナ

これは、レナが圭一（友達）君達と出会う前のこと。茨城に引っ越して中学3年生になった夏休み前日、レナは学校の帰り道はいつも友達と一緒に帰っていた。

「ねえ、レイナ（昔のレナの名前）ちゃん今度の休みどこかに出かけようよ」

この子の名前は、瀬上奈菜ちゃんせがみなな小学生の頃からの親友。転校して来たレナを歓迎してくれた。

「うんどこに行く？あつそうだ！最近できたばかりのケーキ屋さんがあるんだよ！今度そこ行かない？」

「そうなの！？行く行く」

奈菜ちゃんは、目を輝かせて言った。奈菜ちゃんは、ケーキが大好きでよく一緒に甘い物の話をしていた。

「はうゝかぁいいよゝお持ち帰りイイイイ！！」

「きゃっ！！もうレイナちゃん」

奈菜ちゃんは照れながら言った。そして、奈菜ちゃんと別れてまっすぐ家に帰って今日のことをママとパパに話した。2人はレナの話を楽しそうに聞いてくれた。ママが言った

「レイナは、本当にいい友達に恵まれたわね」

「うん!!勉強も教えてくれるし困ったときは、助けてくれるし大好き!!」

ママは、微笑んで言った

「奈菜ちゃんを大切にしておいてね」

「うん!!」

こうして1日が過ぎていった。この後どうなるのか、レナも分からなかった

終わりの始まり（後書き）

勝手ながら、レナのストーリーを書かせていただきました。暖かい目で見てやってください

楽しく（前書き）

訂正が1つあります。1話でお父さんとお母さんなのにパパとママにしてしまったことです。すみません

楽しく

朝、目が覚めて想い浮かぶこと

「あれは一体なんだったのだろうか？」

「よく見えなかったけど誰かいた」

とりあえずベットから出て顔を荒い、髪を整えて、歯磨きをしたそしてお母さんとお父さんのいる部屋へ行って
2人に

「おはよう」

と言った

そしたら、

「おはよう」

と2人は言った

「良く眠れたか？」

とお父さんが言った

「うん！！よく眠れたおまけに奈菜ちゃんと旅行に行く夢をみたんだよ！！」

「そうか、良かったな」

その時、お母さんが料理を運んできた
そして、こう言った

「夢を見るのはいいけどちゃんと現実も見てよね」

「むううう！！ちゃんと見てるよ！！」

その瞬間、どつと大きな笑い声であふれかえった

朝ごはんを食べ終わって奈菜ちゃんに電話をした

「今日、プールに行かないかな、かな？」

「うん、行く」

「あっそうだ！！今日ね奈菜ちゃんの夢を見たんだよ」

「そうなの！？どんな夢？」

「えーとね、奈菜ちゃんとレナで温泉旅行してる夢をみたの！！浴衣姿の奈菜ちゃんかあいよかったな〜お持ち帰りいいしかったかったな〜」

「そうなんだ・・・」

「じゃあ、9時に現地集合するね」

「うん、じゃあね」

「じゃあね」

急いでプールの用意をした。そして、自転車に乗って集合場所に行

った

集合場所に行ってみると奈菜ちゃんが待っていた

「ごめん、待った」

「ううん今、来たところ」

「じゃ、行こっか」

「うん」

レナと奈菜ちゃんが水着に着替えた

「はうううう！！奈菜ちゃんかぁいいいよぉお持ち帰りいいい！！」

「レイナちゃんやめてよぉもう」

こうして楽しい1日は過ぎていった

その翌日、警察から電話があった

奈菜ちゃんの家族が失

踪したという知らせだった

楽しく（後書き）

本当にすみませんこちらの都合でいつ投稿するかわかりませんので、
ご了承ください

別れ

「そっそんな、奈菜ちゃんの家族が失踪するなんて」

「はい、詳しくはまだ分かりませんが、必ずご家族を探し出します」

この後、急いで奈菜ちゃんに電話をした

「奈菜ちゃん・・・大丈夫かな、かな？」

「う・・・うん」

奈菜ちゃんの声は震えていた

「大丈夫、きっと見つかるよ!!」

「うん」

レナは、必死に奈菜ちゃんを慰めた

「何かあったら、電話して」

「うん、ありがとう」

「じゃあね」

「じゃあね」

電話を切りレナは思った

「神様どうか奈菜ちゃんの家族を助けて!!」

奈菜ちゃんの家族がいなくなってもう夏休みが終わろうとしていたある日1本の電話があった

「瀬上さんのご家族が遺体で発見されました」

ショックだった、でも、レナ以上にショックをうけたのは、奈菜ちゃんだったと思う

奈菜ちゃんは、夏休みが終わっても学校に来なかった
後で聞いた話だけど、奈菜ちゃんの家族は、借金があつてレナが奈

菜ちゃんとプールに行った時に川で自殺をしたそうなの
ある日、何か大きな声が聞こえて目が覚めた
声が聞こえてくる方へ行ってみると

お父さんとお母さんが何か喧嘩しているようだった

「おい、この男はこのどいつだ!!」

「違うわよ!!この人は仕事で一緒なだけ!!」

「だったらなんだこの写真は!!」

「普通仕事と一緒にだけで腕を組むか？」

「誤解よ!!」

「もうやめて、やめて!!」

レナは心から、思った

そんな毎日が続いたある日、奈菜ちゃんが登校してきた
レナは、うれしさと不安が同時にきた

「奈菜ちゃん・・・」

「おはよう！レイナちゃん」

「うん！！おはよう！！」

奈菜ちゃんは元気そうに振舞っていたが、本当はまだ辛いのだと分かった

なるべくあの時のことをいわないように気をつけた
この時、奈菜ちゃんが来てくれてとっても助かった
なぜなら、お父さんとお母さんが喧嘩をしてるからだった

「最近、お父さんとお母さんが喧嘩してるのレイナどうしたらいいのかな、かな？」

「うーん、ここはやっぱりレイナちゃんが止めに入るしかないよ」

「でも、大丈夫かな、かな？」

「大丈夫だよ！！」

「ありがとう元気が出た!!」

「どういたしまして」

別れ（後書き）

次から、もう少し文を増やしてみたいと思います

夢

目が覚めた時、まだ夜の3時だった、その瞬間上から誰かがレナを見ていた。暗くてよく見えなかったけどレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰りなさい」

これを聞くとレナは眠ってしまった
今度起きたときは、朝だった

「あれは、一体なんだったのだろう」

「前にもこんなことがあったような・・・」

そんなことを想いながらもレナは着替えて学校に行く準備をした
そしたら、お母さんとお父さんの喧嘩が始まった

喧嘩の内容はいつも同じお母さんが浮気をしてるかしてないかだった
レナは、奈菜ちゃんに言われた通りにこう言った

「喧嘩はやめてよ！！レイナは、お母さんとお父さんが喧嘩してる
所なんてみたくないよ！！！」

2人は、黙り込んだ

「ごめんな、レイナもうしないよ」

「お母さん達が悪かったわ」

2人は、色々反省したような顔だった

「ううん、分かってくればいいよ」

「じゃ、学校に行ってくるね」

「レイナ朝ごはんは？」

「じゃ、行ってきましたーす！！」

「あっ！！もう」

レナは、がんばって走った時間まで残り3分、何とか校門に入って下駄箱に靴を入れてシューズに履き替え、ダッシュで走って行き教室に着いた。教室に入って椅子に座った瞬間にチャイムが鳴り出し

た。

「危なかった」

「レイナちゃん珍しいねこんなギリギリに来るなんて」

奈菜ちゃんは、レナの前の席で授業中によく話しては、先生に怒られていた

「うん、ちょっとお父さんとお母さんを叱ったら遅れちゃって」

「そうなんだ、良かったね、言いたいこと言えて」

「うん！！これも奈菜ちゃんのおかげだよ、ありがとう」

「わたしは、友達として当然のことをやっただけだよ」

その瞬間、安心したせいかレナからお腹がぐうううと鳴ったみんな、啞然としてレナの方を見ていた

レナは、顔がカアアアと熱くなるのを感じた

「そっいえば、朝何も食べてなかったんだっけ」

「いつものレイナちゃんだったらかあいよいよお持ち帰りいいいて言うのにな」

「それを、言わないで」

授業中にもお腹の音になるたびにみんながレナの方を見ていたその日の帰り奈菜ちゃんと一緒に今日の話をした

「もう、本当に恥ずかしかったよ」

「うん、すごい鳴ってたねもう笑いをこらえるのに必死だった」

「むづうう！！奈菜ちゃんのイジワル」

「うそだよ」

しばらくこんなことを話して奈菜ちゃんと別れたそれで、空を見てみたら夕日がすごくきれいだった。まるで真っ赤な血みたい

夢（後書き）

徹夜してつくりました。おかしな点等がありましたら、コメントください

悪夢

10月になってもう学校では、衣替えの季節がやってきた。ある日、学校から帰る途中奈菜ちゃんがレナにある提案をしてきた。

「ねえレイナちゃん、今度の土曜日紅葉見に行かない？」

レナは、ビックリした。いつも出かける時はレナが誘うのに今回は、奈菜ちゃんから誘ってきたの

「うん！！行く！！でも珍しいね奈菜ちゃんから誘ってくるなんて」

「実は、今年の紅葉とても綺麗らしいからレイナちゃんと一緒に見たいな」と思ってた

「そうなんだ」

「じゃあ、わたし家ここだから」

「うん、じゃあね」

「バイバイ」

レナの家は、もう少し先だから今までであったことを、思いだしていた。奈菜ちゃんの家族が自殺したことや、お母さんとお父さんが喧嘩していたことや、夜に見るあの夢など。その時、後ろから足音が聞こえた。「ひた、ひた」とまるで裸足で道を歩いているかのような音がした。振りかつてみても、誰もいなかった。気のせいだと思いまた歩きだしたその時、また「ひた、ひた」と音がしてまた振り返ってみた。でも、誰もいなかった怖くなったレナは全速力で走った何度も転びかけたけど走るのをやめなかった。ようやく家が見えてすぐに、家の中に入った。そして、自分の部屋へ行きベットに倒れこんだ。

そして、ようやく出た一言は、

「なんだったの今の？」

その時、

「おかえり」

お父さんだった

「うん、ただいま」

「どうしたレイナ顔色が悪いぞ」

「大丈夫、なんでもないよ」

「そうか」

お父さんは、あんなふうに言ってるけど心配そうにレナを見ていた
すぐにレナは、お風呂に入り夕飯も食べて寝ようとしていた。けれど、
どうしても今日のことが忘れられなかった。何時間くらいたっ
たのだろう。時計を見たら夜の3時になっていた。その時上から黒
い影みたいなものが出てきてレナにこう言った

「今すぐ雛見沢に帰るのです」

「いや・・・いやーーーー！！！！」

レナは、何がなんだか分からなくなっていた
その瞬間、

「どうしたレイナ！！」

お父さんとお母さんが来て言った

「そこに、黒い影がいるの・・・」

「何もいないじゃない」

気づいたら黒い影はいなくなっていた

「さっきまでここにいたよ!..!」

「レイナはきつと疲れているのよ。ちゃんと寝て疲れをとりなさい」

「・・・うん」

「おやすみ」

「・・・おやすみ」

この悪夢がレナの人生を大きく変えることなどレナも分からなかった

悪夢（後書き）

この話も、徹夜で書きました。何かアドバイスをもらえたら幸いです

助け

奈菜 side

最近、レイナちゃんの様子がおかしい。話かけてもあまり反応がないし、なんていうか・・・心配事があるみたいな顔をしていた。ある日、学校の帰り道勇気を持って聞いてみた。

「レイナちゃん最近元気ないけど困り事とかない？」

「うん・・・大丈夫だよ」

レイナちゃんは笑いながら言ったがそれは、作り笑いだとすぐに分かった。

「ウソだよね」

「ウソじゃないよ」

レイナちゃんは、ちょっと強い口調で言った。

「レイナちゃん・・・困り事があるとすぐ下見るのんだよ知ってた？」

レイナちゃんは、焦っていた。

「レイナちゃん・・・わたし達友達でしょ？」

レイナちゃんは、涙を流しながら言った。

「ご・・・ごめんね、心配かけたくなかったから」

「ううん、いいよでも、わたし達友達じゃない悩んでることがあるならわたしに、相談してもいいんだよ」

わたしは、レイナちゃんに笑いかけて言った。そして、何があったのか全て言ってくれた。レイナちゃんが、変な足音につきまとわれていることや、夜な夜な黒い影が現れてレイナちゃんに離見沢という場所に帰れと言われていること。わたしは、全て信じた。

「じゃあ、その事を調べてくるよ！」

「調べる・・・って、どうやって？」

「図書館で調べるんだよその方が、何か情報があるかもしれないし」

「奈菜ちゃんは強いんだね」

「ううん、ただわたしは困ってる友達を助けただけなの」

「ありがとう」

レイナちゃんは、思いつきり笑った。

「どういたしまして」

わたしは、誰かの役に立てたことが、何よりも嬉しかった

助け（後書き）

すみません・・・ネタがなかったなので奈菜sideでやらせていただきました。レナファンの方々申し訳ありません

真相

レナ side

レナは、奈菜ちゃんのおかげで吹っ切れた。困った事は、友達に言う事が大切なのだと。

奈菜ちゃんが、調べてくると言って何日かした学校の帰り道、奈菜ちゃんが暗い顔でレナの所に来てこう言った。

「調べてきたよ・・・なかなか情報がなくて何日もかかったけど」

奈菜ちゃんは、これまでレナにも見たことのない表情で言った。

「ありがとう、で、どんな事が分かったの？」

「うん、実は前黒い影がレイナちゃんに「離見沢に帰れ」って言うてたんだよね？」

「うん・・・そうだけど」

「その影の正体があったの」

「え・・・誰なの？」

「・・・オヤシロ様」

一瞬レナは、奈菜ちゃんが何を言ってるか分からなかった。でも、すぐに理解した。

お父さんから聞いたことがある。オヤシロ様とは、雛見沢の守り神で禁忌をおかした者を祟りで殺すと呼ばれている。

「そ・・・そんな、じゃあなんでレナの所に来るの？」

「それは・・・レイナちゃんが雛見沢出身だからだよ」

「!？」

昔のレナは、雛見沢に住んでいることはまだ知らされていなかった。ただ、小さい頃、田んぼが多い所に住んでた覚えはあるけどあれが雛見沢なんてとても思わなかった。驚いてるレナをよそに奈菜ちゃんが続けた。

「本に書いてあったけど、オヤシロ様はあまり雛見沢出身の人を外に出したくないらしいの、そして、外に出たとしてもいられる時間も決まってるの」

ショックだった。レナは震える声で奈菜ちゃんに聞いた。

「ど……どれくらい？」

「……8年」

え？待って……レナがここに来たのは7歳の頃、ということは今年で……8年！！

「何かの間違いだね、ね？」

「……分かんないよでも、オヤシロ様がレイナちゃんの所に来た理由はそれなんじゃないかな」

「分かった、調べてくれてありがとね」

「……うん」

レナは、奈菜ちゃんと別れた後、急いで家に帰ってお父さんとお母さんにレナが雛見沢出身か聞いた。そしたら、お父さんが言った。

「おお、よく知ってるな」確かにレイナは雛見沢出身だ。でもなん
でそんなこと聞くんのだ？」

「・・・何でもない」

レナは、自分の部屋へ行きベツトに倒れこんで思いっきり叫んだ

真相（後書き）

かなりがんばりました!!

それから

レナは叫び続け、疲れて寝てしまった。朝が来た・・・いつもなら楽しみなはずの学校があまり楽しくなりそうにもない。レナは、・・・泣いた。もうすぐお別れなんて嫌だよ・・・そう思いながらも学校に行く準備をした。そして、朝ごはんを食べて学校に行った。校門に入ろうとしたその時、そこには奈菜ちゃんがいた。奈菜ちゃんも気づいてレナの方を見た。そして、奈菜ちゃんは、レナの所に来て

「おはよう」

と笑顔で言った・・・奈菜ちゃんの笑顔はすぐに作り笑顔だと分かった。なぜなら奈菜ちゃんの顔がやつれてたから。奈菜ちゃんはレナのために泣いてくれてたんだね・・・だからレナも

「おはよう」

と言った

「良い天気だね」

「そうだね・・・」

レナは、前々から気になっていた事があったそれは、「8年たったかどうか？」ということだった。それを、奈菜ちゃんに聞いてみた。そしたら、奈菜ちゃんは暗い顔でこう答えた。

「それは、雛見沢に戻されるんだよ・・・」

「どうやって？」

レナは、恐怖で震えながら言った

「それは・・・分からないよ」

奈菜ちゃんも恐怖で顔がゆがんでいた

「分かった・・・ごめんね嫌なこと言わせて」

「・・・うん」

「じゃあ・・・行こっか」

「うん」

その日の学校の帰り道、奈菜ちゃんは色々と用があつて一緒に帰れなくてレナが1人でいた時、お母さんを見かけた。とてもきれいな服を着てた。何をやってたんだろう・・・それから数日がたつてお母さんに呼び出された。

「何かな？お母さん、用って」

お母さんは、とてもうれしそうな顔でこう言った。

「あのね、お母さん近い時期にレイナちゃんに会わせたい人がいるの」

この時、まさかこんなことになるなんてレナは予想もしていなかった

それから（後書き）

今回は、時間の都合で少ししかかけませんでした。申し訳ありません

愛

お母さんが会わせたい人がいるって言うてたけど誰なんだろう・・・
そう思いながらもとうとうその日がやって来た。お母さんに待ち合
わせの場所に連れて行かれた。そこには、タキシードを着た男の人
で年は・・・30歳・・・くらいかな？その人はとても優しくそう
な人だった。男の人は、お母さんと何か話してからレナの方を見てこ
う言った。

「初めまして、レイナちゃん。ぼくは、加藤秋人^{かとうあきひと}です。お母さんか
ら色々聞いてるよ」

レナは色々戸惑いながらも

「は・・・初めまして」

どうしてお母さんは、この人と会わせたんたる・・・レナはそう思
った。その時、秋人おじさんが

「じゃあ、まず映画に行こうか」

と言った。秋人おじさんはレナとお母さんの手を握り映画へと連れ
て行かれた。恋愛ものの映画だった。レナは、泣きながらその映画
を見て最後のシーンには・・・はうし恥ずかしくて言えないよ！そ
して、映画が終わり次は、お昼ご飯を食べた。それでデザートは・・・
・チョコレートパフェ！！おいしすぎてバクバク食べてしまった。
それを見てお母さんは

「こら！レイナ！はしたないわよ」

と言った。そしたら秋人さんは

「いや、うますぎるからしょうがないんですよ。よくばくだつてついバクバク食っちゃうんですから」

と言った。お昼ごはんが終わって色々な所を散歩した。そして、日が暮れて秋人おじさんと別れてお母さんと一緒に帰った。そして、お母さんが笑顔で言った。

「今日、楽しかったわね」

「うん！！」

レナも笑顔で言った。そして、お母さんは笑顔のままこう言った。

「今日のことは、お父さんには秘密ね」

「え、何で？」

「知らない人と一緒にいたらお父さんがやきもちやくから」

お母さんは、言った

「あっそうか！ーうん分かった」

「約束よ」

「うん！ー」

そう言つて家に入った。今日の1日はこれでお終い。その翌日、お母さんに呼び出された。

「ちょっと外に出かけない？」

「別に・・・いいけど」

そして、レナとお母さんは、出かけて散歩してそのカフェに寄った。レナは、またパフェを注文し食べようとした時にお母さんがこつ言つた。

「レイナちゃんは、秋人おじさんのこと好き？」

「・・・」

「ねえ、レイナちゃんはお父さんとお母さんどっちが好き？」

「お母さん！..」

「もしも、お父さんとお母さんが別々のおうちに住むと言ったらレイナちゃんどっちのおうちに住みたい？」

「え...」

「お母さんねお父さんと別れて秋人おじさんと結婚しようと思ってるの」

「え!..?」

「お母さんね、妊娠してるの」

愛（後書き）

無理やり本編につなげた部分があるかもしれませんが、ご了承ください

情愛 前編

え・・・今なんて？

「お母さんね結婚するの」

やめて・・・

「それでね」

やめて・・・

「お母さんねお父さんとね」

やめて・・・

「離婚するの」

頭が真っ白になった。この後お母さんが何を言ってるのか聞こえなかった。そして、話が終わり家に帰った。レナの部屋に入り・・・泣いた・・・ひっそりと。翌日、学校でこのことを菜奈ちゃんに話した。

「何でこうなっちゃったのかな、かな？」

「わかんないけど、それはお父さんとお母さんが決めることでわたし達が決めることじゃないよ」

「うん、そうだね」

学校が終わった後、菜奈ちゃんとは一緒に帰らず急いで家に帰った。

「ただいま」

「おかえり」

お母さんがご機嫌で言った。お父さんを捨てておいて自分だけ幸せになるうて言うの？レナは思った・・・この人はもうお母さんじゃないと

情愛 前編（後書き）

すいません・・・時間の都合で少ししか書けませんでした。

情愛 後編（前書き）

前回、少ししか書けなくてすみません。今度は、ちゃんと書きますのでよろしく願います。

情愛 後編

数日後、レナとあの方は弁護士事務所に行った。なぜそこに行ったかと言うと。これからレナはどこに住むか決めるためだったから。

「レイナちゃんこれからお母さんの所に来るのよ」

その言葉にレナは怒った。

「あなたの家には行きません！！父の家がわたしの家です！もうあなたとも会いたくありません！！」

「でもね、レイナお父さんの家の方に残ったらこれからの生活も・・・」

「わたしのこと気安くレイナって呼ばないでください！！」

こうして話が終わりレナは、お父さんの家に残った。正式に離婚するのは、12月になった。それまで、あの人と一緒に過ごさなければならなかった。何もかもが嫌になった。あの人に買ってもらった物を全部壊した・・・全部。唯一の心のやすらぎは奈菜ちゃんだった。

「最近レイナちゃん暗いけどまた悩み事？」

「うん・・・実は・・・」

全てを奈菜ちゃんに話した。

「そうなんだ・・・」

奈菜ちゃんは、疑問に思うような顔だった

「どうしたの？奈菜ちゃんらしくないよ」

レナは、笑顔で言った。

「うん・・・ごめん・・・実は・・・」

と言うと奈菜ちゃんは口を閉ざしてしまった。

「どうしたの？奈菜ちゃん」

奈菜ちゃんは、呟くようにこう言った

「これって偶然だよね？」

奈菜ちゃんの言葉に驚いたレナはこう聞いた？

「え・・・どういふこと？」

「レイナちゃんは、両親が離婚するんだよね？」

「うん、そうだけど」

「わたしの予想だとレイナちゃんはお父さんとどこかに転校するんだと思う」

レナは、まさかと思いながらも聞いてみた

「どい？」

奈菜ちゃんは言った

「離見沢・・・」

狂気

そんなはずはない・・・レナはそう思った。そして、奈菜ちゃんにこう言った。

「まさか・・・そんなことあるわけないよ」

奈菜ちゃんは、笑って言った

「そうだよね」

「うん、そうだよ」

でも、奈菜ちゃんの言葉がどうしても気になった。そして、数日がたったある日、お父さんに少し呼び出された。

「レイナ、自然は好き？」

「うん・・・好きだけど・・・」

「そうか、そうか」

お父さんは笑って言った

「それが何？」

「今度、自然の多い所に住むんだ」

「え．．．ここ離れちゃうの？」

「ああ、そうだよ」

奈葉ちゃんの言葉が頭をよぎった

「どこに？」

お父さんがにこやかに言った

「雛見沢村」

やっぱり．．．

「そうなんだ．．．じゃあレイナは自分の部屋へ戻るね」

笑顔で言った

「そうか・・・分かった」

レナは自分の部屋へ戻ってベットに倒れてレナは思った。もうどうでもいい・・・。そしたら急に・・・笑いが止まらなくなっていた。

「あっはっはっはっはっはっは・・・オヤシロ様はいるんだ」

惨劇

奈菜 side

最近、またレイナちゃんの様子がおかしくなった。学校の中で話しかけても返事がなく、1人でぶつぶつ言っていて。わたしは、不安になった。そんな毎日が続いたある日、レイナちゃんがわたしにこう聞いてきた

「奈菜ちゃんは・・・オヤシロ様はいると思う?」

「・・・」

いきなりそんなこと聞かれたから。わたしは困惑した。

「答えて!!」

レイナちゃんがすごい声で言った。わたしは恐怖でいっぱいになった。

「・・・ごめん・・・オヤシロ様はいるとは、思っ
てないよ」

「嘘だ!!」

レイナちゃんの声が学校中に響いた

「嘘じゃないよ……」

「嘘だよ……本当は心の中ではオヤシロ様はいるってそう思ってるでしょ……」

その瞬間、レイナちゃんはいきなりロッカーにあった金属バットを取り出し……パリイン……教室の窓をたたき割った。

「何やってるのレイナちゃん!!」

そしたら、レイナちゃんはニターと笑いながらこう言った

「だって、オヤシロ様がやれって言ったから……」

レイナちゃんの目を見てみるといつものレイナちゃんじゃなかった。

「あなたは……誰？」

「何言ってるのかな、かな？レイナだよ……」

そう言うとレイナちゃんは次から次へと窓をたたき割った。それを

見たクラスの男子達は、レイナちゃんを止めに入っただが、レイナちゃん、バットで男子で返り討ちにしたら。そして、次の瞬間レイナちゃんはこの世の者とは思えないくらい笑っていた。

[illegible]

「やめて．．やめて――――！！！！！！」

惨劇（後書き）

誠に申し訳ありませんが次からの投稿を17日にさせていただきま
す。

傷（前書き）

今回は、特に短いです。すみません!!

傷

レナ side

パリン・・・パリン・・・ガラスの割れる音が学校中に響いた・・・レナは言われる通りにガラスを割っていった。そして、邪魔するものは全てバットで殴った・・・親しかった男の子や親友の奈菜ちゃんまで・・・そして学校全てのガラスを割ったら急に力が抜けて先生に取り押さえられた。警察に連れて行かれる時に見た奈菜ちゃんの顔・・・恐怖で歪んでいた。レナは、友達になんて事をしてしまったんだろう・・・！！レナは、後悔した・・・レナは、警察から事情聴取された後に精神科に行った。

担当の先生はとても優しくそんな人で笑顔でレナに話しかけてきた

「何でこんな事したの？」

「私は、オヤシロ様に言われた通りにやっただけです」

「そのオヤシロ様って何？」

「オヤシロ様は神様でよく私の枕元に現れるんです」

担当の先生は紙に何か書きながらレナの話聞いていた。そして、話が終わった。レナは、学校の事件でしばらくの間謹慎処分となった。でももうすぐここを引越すんだからからそんなのあってもな

くつても関係ない・・・レナはそう思った。ある日、あの人は荷物をまとめていた。そう・・・今日は約束の日だった・・・あの人は荷物をまとめた後にレナに

「本当に来ないんだね」

と言いあの人はレナに薬を置いていき出て行った。レナは、あの人はレナがこんなひどいことになっているのにあの人は自分のことばかり・・・レナはイライラして置いてあった薬を投げた。レナは、しばらく自分の部屋にこもった。しばらくたったある日、誰かが訪ねてきた・・・レナはドアを開けてみた。

そしたら・・・

傷（後書き）

！ 次回はいよいよ最終回です。応援してくださった方々に感謝です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1000z/>

ひぐらしのなく頃に歴～過去の記憶編～

2011年12月17日21時51分発行